

あれ？ 私、また寝ちゃってたんだ……。

バスはもう終点の駅前に着いたようだ。身じろぐと隣のお兄さんに肩が当たってしまった。

「す、すみません……！」

「いえ。僕こそ、すみません」

小声で謝ると、ニコ、と微笑まれて心臓が跳ねる。爽やかな笑顔と共に去っていくお兄さんにぼーっとしていると、あっという間にバス内から人がいなくなってしまった。慌てて立ち上がる。

……ん……？ なんか、私……変、かもしれない。

身体が熱っぽくて、ぞくぞくする。でも風邪みたいな感覚じゃなくて……人えっち、し終わったあと、みたいな……。

……えっちな夢とか、見てたのかな。あのお兄さんの隣で。……恥ずかしい。

太ももをこすり合わせてから、急いでバスから出る。

視線を感じたような気がするけれど——きつとバスの運転手さんだろう。そう思いながら、学校に向かった。



ろこもこうちぎ

絢辻 透

「——あの、彼女困っていると思うので」

「なんだあ？ お前に関係ねえだろうが！」

「……それなら、あなたも彼女に関係のない人ですよね？」

きつかけは、バス内で変なおじさんに話しかけられ、セクハラまがいのことを言われたりしていた時だった。

地味めな格好で背が小さいからか、度々こういうことがある。その日もまたか……と思いながら話しかけてくるおじさんを前に縮こまっていると、間に入ってくれた人がいた。

それがこのお兄さんだ。

「あ、ありがとうございます……！ ……あのつ、本当に……助かりました！」
「いえいえ。助けられて良かった」

あのあと、おじさんに悪態をつかれながらも私の隣を陣取ってくれて……そこから毎日、私の隣にはお兄さんが来てくれるようになった。

私とお兄さんはどちらも始発から乗るので、ある時からは毎回私が一番

後ろの席に乗るようにして、お兄さんが隣に座る。

特に何か示し合わせているわけではないのだけれど、そうすることで変な人に絡まれることはなくなつた。

だからといって話しかけられるわけでもなく：私がたまに、ありがとうございますと
ございますとかすみませんとか、頭を下げるくらいに関係。

その距離感に、本当にとっても助かっている。
安心して寝てしまうくらい。



昨日の自分を思い出して少し気まづくなりながら、いつものように後ろの席に座る。

続いてお兄さんもやってきた。恥ずかしくてびくつと身体を震わせてしまったのをお兄さんが気づいたみたいで、ちよつとだけ逡巡させてしまつ

た。私は慌ててぶんぶんと首を振って、お願いします、と小声で言う。

お兄さんは安心したように笑って、隣に座ってくれる。

よかった、誤解させずに済んだみたい…。

私もすっかり安心して、背もたれに寄りかかった。

（バスってどうしてこんなに眠くなるんだろ……昨日も遅くまで勉強してたからなあ……）

うとうとと、舟を漕ぐのを止められない。

始発から終点まで乗るから乗り過ぎす心配はないけれど、お兄さんの前で変な寝言とか言っちゃったらどうしよう…そう思いながらうつらうつらしているうちに、ふいにお兄さんの肩に頭が当たってしまった。

「はっ…す、すみません…！」

「いえ、大丈夫ですよ」

柔らかなお兄さんの声に少しうつとりしてしまふ。慌てて窓際のほう

に座り直そうとすると、制止するようにお兄さんがこちらを覗き込んできた。

「……僕の肩でよければ使って頂いても構いませんが」

「いつ、いえ、そんな……！ 恐れ多いです……！」

「ふ……そんな大層なものじゃないですから。どうぞ」

どうしよう、断るのも申し訳ないけど……とぐるぐる考えていると軽く腕を引かれ、そのままこてん、と凭れかかってしまった。お兄さんは背が高いから肩というより腕に頭をくっつけてしまっている。

スーツの上からでもわかる、すらつとして逞しい二の腕の感触と、じんわりと感じる体温。

……やばい。ドキドキしちゃう。寝れるわけないよ、こんな……。

そう思いながらも心頭滅却……と心の中で唱えながら寝たふりをする。けれど。

「——……寝心地、悪いですかね」

「はっ……す、すみません、違うんです」

少し申し訳なさそうに言われてしまつて慌てて頭を上げた。

寝たふりなの、全然バレてた……。

心配げなお兄さんの色素の薄い長い睫毛が瞬いて、状況も忘れて見惚れそうになるのを堪えて首を振った。

「えつと……その、お兄さんが恰好いい方なので、緊張しちゃつて。すみません、気持ち悪かつたですよね……!」

「……僕が? いえ、全然。そんな風に言つて頂けると思わなかつたんで、嬉しいです」

花が綻ぶように笑われて、頬に熱が集まる。あまりに眩しい……。

ただ、せっかくこうして会話が出来たのだからと思ひ立つて、聞いたかつたことと今まで伝えられてなかつたことを伝えることにした。

「すみません、変なことを……あつそうだ、お名前だけ、教えてもらえませ

んか。あつ、私は片桐……片桐優菜って言います」

「はい、ええと……片桐さん、僕は一ノ瀬です。一ノ瀬蓮といいます」

「一ノ瀬さん……あの、ホントにいつも、ありがとうございます……！」

「いえ、僕は大したことは」

「私、たまに……ああやつて声をかけられちゃつて、逃げられなくなっちゃうことがあつて……だから、一ノ瀬さんが、あのとき助けてくれて……こうして隣に座ってくださつて、本当に助かつてるんです」

「……本当ですか。——いやあ……」

照れたように髪を耳にかける一ノ瀬さん。絵になるなあ、なんて呑気に考える。

「……良かった。実は僕も、毎日隣にいたら気持ち悪いかな？　なんて思つてたんです」

「えっ、いえそんな、全然……！」

「変な人に声をかけられるよりはいいかなあ、と思つて……今日はちよつとびつくりしてみたいだから、心配したんですけどね」

「違うんです！ あの……私、よく寝ちゃうので、寝言とか言ったり今日みたいに凭れて迷惑かけてないかなとか、そう思ってただけなんです」

「なるほど？ 全然そんなことはなかったですよ。むしろさっき言ったように凭れても構いませんし……ああでも、急に知らない男の腕で休めって言われても、戸惑っちゃいますよね」

「いえ、その、ドキドキしちゃっただけなので……！」

「……ドキドキ、しちゃったんですか」

「はっ……すつ、すみません……」

「いえ。……可愛いなあ、と思って」

くすくすと笑われて顔から熱が冷めない。優しい上にそんなこと言うのズルすぎるよ……。

結局その後眠気が飛んでしまったので、一ノ瀬さんと他愛のない話をし、駅まで過ごした。バスのエンジン音が近かったからか、私の言葉を聞くために顔を近づけられてまたドキドキしてしまった。



「……片桐さん？ おはようございます、……大丈夫ですか？」

「あ、一ノ瀬さん……！ おはようございます……えへへ、ちよつと寝不足でして」

次の日。

長い通学時間で常日頃から寝不足気味な私だったが、昨日もテスト前の勉強をしているうちに、とうとう朝日を見るまで眠ることができずに過ぎてしまった。

目の下にくつきり青いクマができたまま、既にうつらうつらとしているのをすぐ気付かれてしまったみたいで、恥ずかしい。

一ノ瀬さんは憂いを帯びたような表情をして隣に座る。今日も格好いいなあ、なんて思いながらぼんやりとしていると、ふいに一ノ瀬さんの腕が伸びて、昨日のようにこてん、と凭れかけさせてくれた。

え、何……？ これは……夢……？？

「良ければ僕を、枕代わりに」

「へ……っあ、いえ、でも、」

「ドキドキしちゃいますか？　そうですね……僕のこととは、大きめの石かなにかだと思つて貰えれば」

「そんな……失礼な……こと、……でき、ません……」

こんな綺麗な石があるわけがない……と思いつつも、連日の寝不足で頭が回らない。

頬から伝わる暖かい体温に釣られてぼんやりしてきた。

「……ああ、よかった。ゆっくり休んでね——……優菜」

落ち着いた優しい声で名前を呼ばれるのが、夢か現実か、もうわからない。バスの出発と共に、ほとんどすぐに意識が途切れてしまった。



——さす…♡

すり……すり…♡

地肌に暖かい手が触れている。そういえば少し暖かくなってきたから、昨日より薄着で来たんだっけ…。

まだ眠くて、暖かさしか分からないけれど——その手は脇付近を掠めて、確実に胸へと這わされていく。

(ん……なんか、くすぐりたい…)

優しく撫でるその手がなんだかむず痒くて身じろぐ。けれど手は止まることはなくて、そのまま胸の頂上へと届いてしまった。

きゅっ…♡

（あっ……？）

知った手つきで乳首を甘く引っ搔かれてしまった。

じゅわ……♡と腰元から熱が灯る。期待するように身体の力が抜けて、足が開いてしまう。

（なに……？ ゆ、め……？ どうして……）

——どうして私、バスの中で……おっぱい、出してるんだろう……？

一番奥の席で、やや窓側に向かった体制を取っている。背中側から暖かな体温と、一ノ瀬さんからいつもほんのりと漂う、眠気を誘うホワイトムスクの香りを感じる。

後ろから抱き締められて、服のボタンが外されて、丸見えの胸の先を、こりこり♡ すりすり♡ と、擦るように弄られていた。

「ん、う……っ♡」

「……優菜？　ダメだよ、動かないで……？」

とろけるほどに甘い声が届く。一ノ瀬さんの声だけど、さっきと全然違う響きだし、名前で呼ばれてる……？

やっぱり夢を見てるんだ、私。隣で寝てたはずなのに、こんなえっちな夢見て恥ずかしい。でも。

もにゅもにゅ……♡

カリ♡　カリカリカリ♡

（どうしょ、…きもち、いい…♡）

丸出しのおっぱいをやわやわと揉まれて、ぴん♡　と勃起した先っぽを指に挟まれてかりかりと擦られる。その度に熱っぽい吐息を何度となく吐いてしまつて恥ずかしい。

熱に煽られてもじもじと腰を揺らしていると、また甘い声が聞こえてきた。

「優菜……バスの中で乳首いじられて、気持ち良くなって腰揺らしてるんだ……？　可愛い、もつともつとて言ってるみたい……」

甘い声で恥ずかしいことを囁かれてびくびくと身体が震え出してしまった。首を振りたいけれど意識がうすぼんやりとしていて、身体がうまく動かない。

その間にも手は止まらずに、腋付近から擦るように撫でては、乳輪のまわりをくるくる♡　くるくる♡　と指で辿る。

（や…焦らされてる……っ♡）

「周り触ってるだけなのに、身体びくびくしてるね……おっぱいのさきっぱかりカリされるとすっごく気持ちよさそうだもんね、優菜……かりかりされるの想像しながら、もうちょつとだけ、我慢しようね……？」

くるくる♡　　もにゅ♡　　さすさす……♡

完全に勃起した乳首を放置されて周りばかり撫でさされる。やだ、早く、カリカリして欲しくなっちゃう……♡

我慢してるのがつらくて、甘えるみたいにぴったりくっついた身体に擦り寄る。

「優菜、触って欲しがって甘えてきてるの、可愛い…最初は擦ったそうにしてたけど、今はすっかり感じて犬みたいにはっ、はっ♡　って甘い息出るようになったね、偉いね……乳首だけでイけるようになるまで、いっぱいカリカリしてあげる——…ほら、触ってあげるからおっぱいのさきっぱ、集中して……？」

最初は……？　確かに私、何回もこういう夢、見てる、ような……ううん、それよりおっぱいのさきっぱに、集中しなきゃ……。

鼓膜へ囁かれる言葉に釣られて徐々に呼吸が荒くなって、身体も顔も熱っぽくなっていく。

——かり……♡

かりかりかり♡　くにくにくに♡

(あ♡　あ…♡　これダメ、頭びりびりしちゃう…っ♡)

焦らされた分、痺れるような甘い刺激が襲ってくる。
もっともっと、と腰が揺れる。それに応えるように、優しかった指先がだんだんと激しいものになっていく。

カリカリ♡　くるくる♡
ぴんっ♡　ぴんっ♡　ぴんっ♡

「…っっ、ん、ふう…っ♡」

(だめ♡　乳首はじかれるのため、きもちいい…っ♡)

ぶるぶると身体が震えて高まってきているのを感じる。けれどそんなこと関係ないみたいにならずとずっとずっとカリカリを続けられてしまう。

本当にこのまま、乳首だけでイけるようになったら、どうしよう……♡

「立派な勃起乳首になったね、優菜——えっちな声出して気持ちいいの伝えてくれて可愛い、偉い偉いっていっぱいカリカリしてあげる。ほんとはこうやって、ぬるぬるの舌でくにくにしてもっと褒めてあげたいな……」

こうだよって言うみたいに指先でくにくに♡ くにくに♡ と乳首を弄られる。一ノ瀬さんの舌がさきつぽに触れるのを想像してしまう。お腹の奥がうずうずしてきて、欲しがってるのが分かってしまつて恥ずかしい。

恥ずかしくて身を振り足を閉じようとする、またダメだよって言われるみたいに身体を抱き込んで抑えられてしまった。

「こーら、足閉じないで？ 優菜、ここも好きだよね……ああ、乳首カリカリされるだけで期待してぷっくりしてるのわかるよ、簡単に摘まめちゃうね……？ 期待して勃起してるクリ隠れちゃわないように、足、ちゃんと開いてようね」

(ひ……っ♡ 弱いところ、ばれてる……♡)

スカートの中に入った手はそのままパンツを辿って、クリトリスをタップする。

勃起してしまったクリトリスはパンツの上からでもしつかりとわかるほど膨らんでいたみたいだ。

囁かれる言葉に抵抗できず、足を閉じられない。とんとん♡ と、確かめるようにクリトリスを指の腹でノックされながら、丸見えの乳首にもカリ♡ くにくに♡ と、強くない刺激を一定のリズムで送られる。

「ん…っう、う…♡」

「ああ……足、開いてきたね——…ちゃんと僕の言う事聞けたね、優菜。偉いね、ご褒美あげるから、おまんこに集中してみようか。ここ、優菜のビンビンに勃起したおっきいクリトリス、これから指の先でカリカリするから、しつかり味わって？」

クリトリスを正面からタップしていた指が徐々に下へと辿って、裏筋の

根本からカリ…ツと引っかく♡

(あ、あ♡ ご褒美、気持ちいいの、きた♡ これ好き…♡)

カリカリカリ♡

こすこすこすこす♡

「はっ、ひっ…♡ ぐ、っ!？ んう、~~~~っ♡」

「優菜、ちよつとだけ声…我慢できる？ 可愛い声いっぱい聞きたいけど、他の奴に聞かせたくない…はあ、優菜の声聞きたいな…キスもしたい…
…けど、今はいっぱい、感じてるところを見せて？」

口元にそつと手を当てられて息が苦しくなる。それと共に吹き込まれる甘い言葉にすら感じ入ってしまったって身を振り、必死に我慢しながら快感に耐える。

カリカリ♡

すりすりすり…♡

（だめ…声、我慢、しなきゃ…バスの中、だもんね……。でも、そんな風にクリコスすこすされるの、無理…♡ よしよしって可愛がられてるみたいにかりかりされたら、腰揺れちゃう…っ）

ぬちゅ…♡

くりゅくりゅ♡ すりゅすりゅすりゅ…♡

我慢すればするほどへこへここと腰が揺れて愛液が溢れ、一ノ瀬さんの指が濡れてしまった♡

「ああ…：：：パンツ濡れちゃったね、優菜。わかる？　これが優菜が感じて、僕のちんぽ欲しい欲しいってしてる証拠。優菜のおまんこの奥…：：：ここ、意識して？」

口元を覆っていた手が降りてきて、おへその下をくいと軽く押す。誰にも触られたことがないそこがきゅうん、と疼いて、下腹がひくひくと震え

た。

いい子、ちゃんと意識出来たね、と囁かれて身体が震える。

かりかり♡　くりくりくり♡

ぬるついた指で褒めるようにクリトリスを何度も引つかかれる♡

我慢が難しくて体がかたかたと震え出してしまった。

（だめ、これ、気持ちい…♡　お腹押されながらクリいじめられるのダメ♡
こんなことされたら明日から隣に座る度に思い出してえっちな気持ちになっちゃう♡　絶対だめなのに、もう身体がイきたがつちゃってるよお…♡）

前の席には人がいるのに、高まる快感を止められない。

苦しいほどの快感に声を抑えようと必死に両手で口を塞ぐ。

「…声、頑張って抑えてる？　ちゃんと僕の言う事守ろうとしてくれてるんだ…可愛い、優菜…偉いね、ご褒美に優菜のおつきくてエッチなクリトリ

ス、直接こしこししてあげる」

直接…こしこし…♡

嬉しい♡ 嬉しい♡　と言うように足が開いてしまう。パンツの隙間に一ノ瀬さんの細い指が入ってきて、待ち遠しそうに屹立していたクリトリスをすり…♡　と撫でられる。

（あ♡　あ…直接、きたあ…っ♡　ぐちよぐちよで、恥ずかし…っ♡）

こしこし♡　すりゆすりゆ♡

くりゆくりゆくりゆくりゆ♡

ぬるついて逃げるクリトリスを追いかけて何度も裏筋から追いかける。先程よりも直接的な刺激に頭がびりびりとして、口を抑える手に力がこもる。

「ふ…優菜の恥ずかしがり屋なクリトリス、ぬるぬるで逃げちゃうね。両手で捕まえちゃうから、自分で声抑えてて、ね…?」

お腹を抑えていた手がすると下へと這わせられて、両手でおまんこを捕えられてしまった。片手で被った皮を引っ張り、ぽってりと真っ赤に腫れたクリトリスを露出させられてしまう。

（あ……っ♡ これダメ、絶対ダメなやつ♡ 一番弱いところかやすいよ
うに引っ張られちゃって、今からこれ、触られちゃうんだ……♡）

カリカリカリ♡
ぴん♡ ぴん♡ ぴんっ♡

「~~~~っ♡♡♡ あっ……う……くう……っ♡♡」

ぴんと張った真っ赤な先っぽをよしよし♡ するみたいに撫でられて、悪戯に弾かれて身体ががくがくと揺れる。あまりに強い快感に抑えている口からふーっふーっ♡ と興奮しきった声が漏れて恥ずかしい。

「一生懸命声抑えてて可愛いね、優菜。身体ぐーって伸びてきてちゃんとイこうとしているのわかるよ……？ このままデカクリよしよししてあげるから、バスで本気クリアクメ頑張って？」

恥ずかしい言葉を囁かれ続けながら、もう摘まめるほどに大きくなってしまうているクリトリスを追いつけられる。

くりくりくりくりくり

♡

こちゅこちゅこちゅこちゅこちゅ♡

（だめ、クリしこしこされるの気持ちいい♡ バスで気持ちよくなつて♡ 人がいるのにおっぱいも丸出しで♡ 窓から人に見られちゃってるかもしれないの……♡♡）

太ももから足先にかけて力が入る。

伸びた背筋を一ノ瀬さんの背で支えられていて、クリトリスはずっとこしこし♡ こしこし♡ され続けていて……だめ、本気クリアクメ、きちゃ

う……ッ♡

「んう、……~~~~づう、ツツ!!♡——あ、イ……ッ……つ、う……♡」

びくびくびくつ、と身体が震えるのを一ノ瀬さんに抱きすくめられて、逃げ場のないアクメを味わわれる。

♡
イっちゃった、一ノ瀬さんに……クリトリスよしよしされて、バスの中で……

快感の余韻にうつとりと瞼が落ちかけた瞬間だった。

「づ!?! ううつ、~~~~……!!」

ぐちゅっ♡ と音を立てて一ノ瀬さんの指がおまんこの中に入ってしまった。

うそ、まだ終わらないの……?!

「クリアクメ上手にできて偉かったね、優菜…？ 覚えの早い優菜ならもっと深いおまんこアクメもすぐ覚えられると思うから、今日はもうちよつと頑張ろつか。お腹に力込めて、気持ちいいなって思うとこしっかり意識して？」

囁かれる言葉に抗えずに、ぐっとお腹に力を入れてしまう。一ノ瀬さんの指を離さないとばかりに締め付けてしまつて恥ずかしい。

愛液でとろとろの内壁を進んで、すぐにざらざらしたところに辿り着かれてしまった。

くちゅくちゅ♡ すりゅすりゅ♡
とちゅとちゅとちゅとちゅっ♡

（あっ♡ さっきいったばかり、だから♡ 敏感なのに、激しくされちゃつて、る♡ むり♡ こんなまた、すぐイっちゃうよお…♡）

クリトリスも一緒にすりすり♡ くりゅくりゅ♡ と擦られてしまつて

腰のビクつきが止まらない。

あまりに強い刺激がつかなくてふるふると首を振って身体を振るのに、一ノ瀬さんの手は止まることなくずっと的確に気持ちいいところを責められる。

「気持ちよくてイヤイヤしちゃうの？　ほんと可愛い、優菜……イヤイヤだめだよ、ここが気持ちいいのちゃんと覚えようね。ああ……優菜の子宮口、ちゃんと降りてきてる。ひくひくしてるの分かるよ、直接見たいなあ……奥何回もトントンしてあげるから、ふかーい中イキしようね」

おまんこの奥を可愛がるようにすりゆすりゆ♡　撫でながら催眠のように吹き込まれて、頭がどんどんぼんやりとしてくる。これからトントンしてもらうから、おまんこだけに集中しなきゃ……。

とちゅとちゅとちゅとちゅっ♡
かりかりかり♡

（あ、これ、む、り…っ♡♡ さつきより重い気持ち良いがきて息ふーっふーってなっちゃ♡♡ 恥ずかしいのに…止められな、い…っ♡）

一ノ瀬さんの指の動きが激しくなることはないのに、私がおまんこを無意識のままひく♡ ひく♡ させてしまうせいで断続的な刺激が襲ってくる。

遠ざかったはずの絶頂感がまた近づいてきて、身体がかたかたと震え出す。

「っ、う……、い…い…ち、のせさ……、も、…っ♡」

囁き声で辛うじて名前を呼んでもう限界なことを訴える。

「…もうイきそう？ ちゃんと教えてくれるの可愛い…本当は僕のちんぽでガン突きしながらイかせてあげたいけど…いいよ、足しっかり開いて、声だけ頑張って我慢して？ 奥のこりこりしたところ、ここでイって」

優菜、ちゃんとイけたね、可愛いね……という、甘い言葉を遠くに聞きながら——そのまま瞼が落ちてしまった。



——次は駅前、終点、終点です。どなたさまもお忘れ物のないように——…

「はっ!？」

アナウンスがぼんやりと聞こえて私はがばりと起き上がる。どうやら一ノ瀬さんに凭れたまま寝て……あんな夢を、見ていたみたいだ。

「……大丈夫ですか？」

「あっ!?! す、すみません、私すっかり寝ちゃってた、みたいで……!」
「ああ、いいえ。枕にと言ったのは僕ですから」

夢の中のとろけるほどに甘い声とは違う、いつも通りの一ノ瀬さんの優しい声が聞こえる。

……恥ずかしい。あんな、……私、あんな夢を……一ノ瀬さんの肩に凭れたまま、見ちゃってたんだ……。

「……片桐さん？」

「へっ……」

「顔が……少し、失礼しても？ ……ああ、やっぱり熱い。熱がありそうですわね」

指の甲でそつと頬に触れられる。

既に体の熱という熱が顔中に集まっていたはずなのに、余計に熱が上がってしまった。

「こっ、これは……多分風邪とかとはちがうやつなので、大丈夫です……！」
「なら、いいんですが……今日は無理せず、休めるなら休んだほうが」

「大丈夫！　大丈夫、です……！」

急いで立ち上がって、心配そうに私を見る一ノ瀬さんに首を振り並んでバスを降りる。そのままありがとうございました、と頭を下げて学校に向かうと歩き出した。

あまりに恥ずかしいし、一ノ瀬さんの傍にいたいと思いつつと顔が熱いままになってしまう——そう思つて急ごうとするけれど、寝起きだから足取りがふらついてしまつて。

前に話しかけられたことのある怖そうなおじさんにぶつかつてしまつた。

「なんだあ？　痛えな、コラ」

「す、すみません……！」

「ちゃんと前見て歩けねえのか？　　つたく、しょうがねえなあ、俺がこうやつて肩抱いて歩いてやろうか？」

私の顔を見て相手も思い出したようで、にやにやとしながら腕を伸ばし

私を抱き寄せようとしてくる。

驚いて反射的に避けようとする——……ガツと音がして、おじさんの腕が逆方向に回っていた。

「いつ……ってえな、なんだお前エ!？」

「い、一ノ瀬さん……!？」

「……彼女の知り合いです。すみません、彼女、今日体調が悪いようで。僕が付き添いますので」

気が付けば後ろに一ノ瀬さんが立っていた。ギリギリと関節が鳴っていて、尋常じやないほど力を入れていることがわかる。一ノ瀬さんのほうを見ると、いつも優しい笑顔とは裏腹の据わった目でおじさんを睨んでいた。

おじさんは必死な様子で腕を振りほどき、何かよくわからない捨て台詞を吐きながら逃げていつてしまった。

また助けられてしまった……!!

「一ノ瀬さん：ほ、本当にすみません、ありがとうございます……！ 私、助けられてばかりで」

「いえ。片桐さん、やつぱり体調が悪いんですよね？　ここ……会社近くなんですが、僕が筋トレの器具用に借りてる部屋があるんです。広くはありませんが、ベッドはありますので、そこで休みましょう」

「えっ、いえ、そんなにお世話になるわけには……！」

「……僕が、心配なんです。今みたいに変な人に絡まれたらと思うと……ダメですか……？」

確かに、さつきから全身がだるいような気がするし、そもそも寝不足だしで体調が悪いのは確かだ。けど、あまりにもお世話になりすぎているし……そう思つて首を振ると、しょんぼりした顔でこちらを見られる。

そんな顔されたら、ダメとか言えないよ……！

「え、えつと……でも一ノ瀬さんは、会社、あるんじゃないですか……？」
「うちはフレックスで、申請すればリモートに切り替えることもできるので。ここからすぐなので、お連れします」

「きやつ……!!? い、一ノ瀬さん……こ、これはちよつと、恥ずかしいんですか……!!」

お連れします、の言葉と共に足と腰を抱かれて軽々と持ち上げられてしまった。バランスを取ろうと慌てて首に抱きついてしまったけれど、突然目の前に端正な顔が現れて心臓が跳ねる。

「……ふらついていたでしょう。すぐですから。あのビルです」

優しげだけれど、どこか有無を言わせない雰囲気もあって、私はこくりと唾を飲み込む。

何も言えずされるがままに連れられながら、つい夢のことを思い出してしまつて。

まだ自分、熱が冷めそうになかった。